

分教場の跡を訪ねて その(五)

名に達す

蒲江町立名護屋小学校 葛原分校

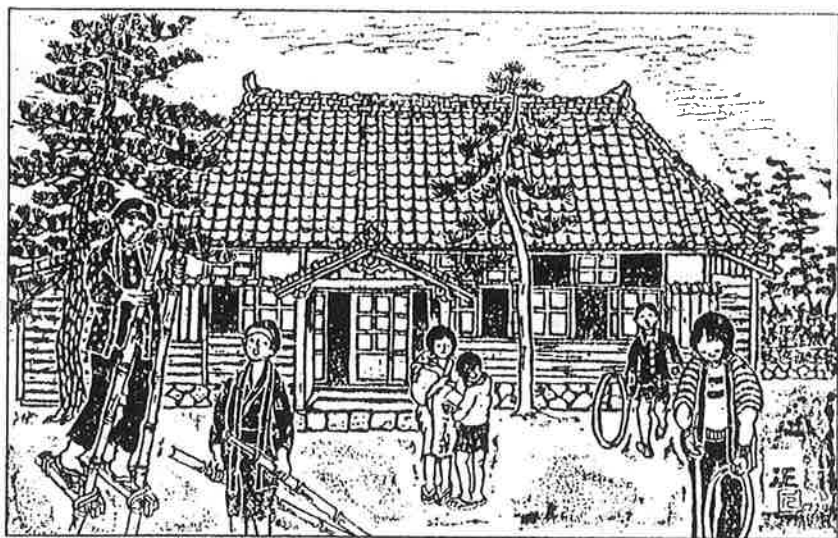
高 司 良 恵

(会員・佐伯市宇山区)

葛原分校沿革

- ・明治七年 蒲江尋常下等小学校葛原分校創立
- ・明治十年 西南の役の為 当地も戦区となり閉校(四月)再び開校(九月)
- ・明治十一年 地方制度の変更に従って葛原小学校と改称す
- ・明治十三年 丸市尾小学校葛原分校と改称
- ・明治二十年 葛原簡易小学校と改称
- ・明治二十五年 丸市尾尋常小学校葛原分教場と改称
学期を四年とす
- ・明治四十一年 義務教育延長六年制となる
- ・明治四十四年 オルガン購入五十八円
- ・大正六年 児童学芸会挙行す盛大なり就学児童二十七

- ・大正十年 分校合併問題 分教場を廃して名護屋尋常高等小学校と改称 四月十六日より廃校
- ・大正十四年 廃校中のところ再び開校
- ・昭和五年 児童数二十八名
- ・昭和八年 校舎大修繕を施す工費十余円
- ・昭和十四年 職員住宅・便所を設く工費三十三円
- ・昭和十六年 名護屋村国民学校葛原分教場と改称
- ・昭和十七年 廊下便所修繕工費五十円
- ・昭和二十三年 地区よりラジオ一台寄贈千七百七拾円
- ・昭和二十九年 高潮を伴う台風十二号来襲校庭は石原と化す九月十三日
- ・昭和三十年 四ヶ町村合併に伴い蒲江町立名護屋小学校葛原分校と改称
- ・昭和三十八年 本校校舎落成七月十七日
- ・昭和四十年 現在の新校舎落成三月一日
- ・昭和四十九年 創立百周年記念式
- ・昭和五十一年 波当津く丸市尾間大分バス開通葛原分校児童登校時一斉利用
- ・平成六年 葛原分校閉校記念式三月二十七日



在りし日の葛原分校 版画は下村正明先生(大分市在住)の作

葛原分校と共に歩み続けた小川リンさんの手記より
・世の流れ時の流れという言葉かみしめて立つ廃校式に
・百余年続きし村の分校の閉ざるる日よ三月二十七日
昭和十三年に小さなこの店を始めまして歴代の分校の
先生もそして子供達とも、つき合いが長いため分校の歩
みを見そして毎日の様子を見るのが楽しみでした。……

この小さな地区から分校をなくしたら、村は淋しく空
っぽになつたような気がしそうです。一握り程の生徒の
数ですが、それぞれの個性をしっかりと受けとめて守られ
ている分校の子どもは、立派に育つて大きくはばたき巢
立つております。この小さな葛原分校今までどおりみん
なで暖かく見守つて育ててゆけないものでしょうか。時
代の流れに勝てません。

・夏休みに入りし分校静かなり周りの木々より蝉しぐれ
降る

村に学校がなくなる。年寄には理解しかねる廃校とい
う悲しい出来事から早いもので、あれから一年になりま
した。廃校になってバス通学に変つた分校の生徒を見送
りながら、世の流れという言葉をしみじみとかみしめざ



記念碑

せられる日々です。
・人影のなき廃校の

グラウンドにサッカー
ボール一つ転がる
以上「潮騒」名護屋
小学校PTA新聞よ
り抜粋させていただ
きました。

葛原分校といえは、
小川リンさん、分校
の子ども達、赴任さ

れた先生方のよき相談相手として、親しまれ人一倍熱い
思いで分校を見守り、分校と共に歩き続けた六十余年。
この方を是非お訪ねしたく葛原へと向かう。整備され
た道路、青山経由、あつという間に轟トンネル、そこを
出てすぐ右折、やや道幅が狭くなる。

初冬の山々は、すでに眠りに入り栗毛色に染まった櫟
林の枯葉が風に鳴っている。空っぽになった山芒が、白
い波を緩やかに描く。錆色の杉林から透けて見える冬の
海。広場で車を止める。遥か山々の稜線が入江深くなだ

れ込みリアス式海岸の美しさを、十分に楽しませてくれ
る。全く平和郷そのものだ。

思い出の糸をたぐり寄せる。昭和二十二年私の初任校
は蒲江小学校だった。当時、屋形島分校、猪串分校があ
った。分校の先生が時々本校に來られていたが、なにか
しら肌離れた感があった。

当時交通の便といえは、蒲江港と佐伯の葛港を通う
「日豊丸」という船、陸路では、「大分バス」が如ノ浦經
由で蒲江まで来ていたが回数も少なく甚だ不便であった。
一週間が終わり土曜日の午後から佐伯の家に帰るとき
は、徒で尾根を越え青山の三軒屋まで歩き、そこからバ
スで佐伯に帰った。

途中轟峠で休んだが頂上には茶屋跡がまだ残っていた。
そばに大きな松の木がありそれが道しるべになっていた。
歩いて帰る同志は二、三人、細い山道を一列に並び谷川
の流れを聞きながら歩いた。数時間かかったが、それで
も佐伯の親元に帰りたい一心であった。食糧難の時代で
もあった。く若い頃の一ページ

再び車を走らせる。対向車は殆んどない。峠を少し下
がって新しい道に入る。すばらしい道だ「もうそこが

野々河内だ」と言う。県道一二号線に出て丸市尾方面に向かう。国道三八八号線早期着工の横断幕が、潮風にはためいている。現存の森崎分校を右手に見ながら、越田尾トンネルを通過、入江には養殖筏が所せましと敷きつめられている。友達二人の先生は名護屋小学校勤務だった。蒲江に着き、それから、おろして越田尾に着きだらだらの峠を越え丸市尾まで歩いて行った。佐伯には徒で尾根伝いに青山まで歩いた。今は想像もつかない夢の様な話である。

海岸沿いに走る、テトラポットに海鳥が羽根を休めている。沖に横たわる深島がすぐそこに見える。深島小学校は今も休校中である。入学児がないからである。

家を出て三十分、葛原に到着した。半世紀の月日の流れは辺地校のイメージを一変させた。

分校跡のすぐ前に小川リンさんのお店があった。八十才を越えられたリンさんは、御健在で若々しく初対面という堅苦しさもなく、すぐ打ちとけてしまった。お互い分校に思いを馳せる者同志として、通じあうのだろうか。開口一番「分校がなくなつて淋しいです。」胸に奥深くずっしりと響いた言葉だった。

子ども達と地区の人達と共存の分校、ふれあいの餅つき、体育会、学芸会……と行事は、いつも地区あげての楽しみで、それが又、生き甲斐でもあった。

分校の子ども達の底抜けに明るい歓声は、空に海に山に響き渡つた。

「淋しいです。ただ淋しいばかりです。」とリンさんは強調する。分校の子ども達一人ひとりをこよなく愛したリンさんの心情が、切々と伝わってくる。先生方との思い出話に花が咲く。お互いのもらい風呂、汲み交わしたお酒、同じ釜の飯を食つた者同志、先生方との厚い絆の数々、ここ葛原まで来るのに船か徒で幾山の尾根を一日中かかって歩いて来た時代、夢の又夢の話だ。

昭和二十九年九月十三日高潮を伴う台風十二号来襲、校庭は石原と化した被害はすごかったと話してくれた。台風が来る度に分校はいつもおびえていたという。

リンさんは言う「葛原が大好きです。」「どうして。」「いやなんとなく自分の生まれた所よりも葛原が大好きです。」入江の小さな浦の分校、リンさんにとっては生き甲斐の分校だった。いつも何事にも心の支えとなつて共に歩み続けた葛原分校。

平成六年三月二十七日、百有余年続いた分校の灯は消えた。とめどなく流れる涙を押さえることができなかった小川リンさんを始め子ども達、先生方、地域の方々、盛大なおわかれの式典もすべて終わった。

分校を巣立った子ども達は幾屋箱を重ねてもその絆は強いスクラムを組み社会人として立派に成人して、各々の分野で活躍されていることと思う。

分校の校庭から黒潮の流れが見える。砂浜が光る。葛原のふるさととは、きっと暖かくいつまでも巣立っていった分校の子ども達を見守っていくことであろう。



運動場跡に残る大榎

校舎をくずした跡地は「葛原運動広場」と名づけられ公園に生まれ変わっている。校庭に残された大幹の榎が、分校の歴史をじつと見守っていくことであろう。子どもにないカラフルな色彩に色どられた分校跡の遊具は、なにかしら空しく淋しく見えた。振りかえり振りかえり分校跡を見た。

小春日和の海は、おだやかでなにかしら慰められる思いで葛原をあとにした。

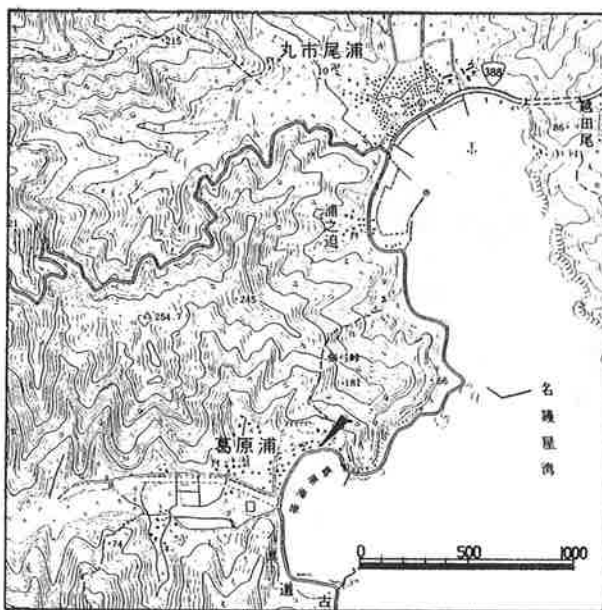
・分校の跡地にぼつんと残されし榎を入り日が包むがに照る
小川リン

葛原校の歌 大入島の高橋文作 作詞

明治四十五年〜大正二年勤務

勇敢なる水兵 元歌

- (一)五十有余の男女子が さも元氣よくおちこちと 通う姿の雄々しさは 葛原校の名に恥じず
- (二)男女の庭に戦うは 陸海軍のゆうぎとて天地もくずれる時の声 これど男女の元氣なり
- (三)梢を鳴らす風の音や 漁夫の網引大声や岸辺を叩く大波の 音にも勝る我が男女



(四) 清き流れの大川に 姿を映す山の景

月の眺めのその末を あらそうべきや健男女

歌詞の中から、軍事思想の徹底した当時の教育が伺われる。葛原の人達は、胸をはり力強くこの歌を歌ったことであろう。又、戦場で、ふるさとを偲んで口ずさんだことだろうこの歌を!!

現在、葛原地区の世帯数は七十五戸で二百五十四人

本校名護屋小学校に十名の児童が定期バスを利
用通学している。

今回は分校と共に長き道のりを歩んでこられた分校の主ともいわれる小川リンさんをお訪ねして、手記、短歌、思い出話をいただきました。深謝申し上げます。

蒲江町教育委員会管理課より御多忙の中資料を送付していただきました。